

## 漢晋間における新しい宮城プランの確立と成熟

朱岩石

本日の報告では、漢晋間における曹魏～三国魏の鄴城(以下、曹魏鄴城と略す)と三国魏の洛陽城というふたつの都城の考古資料をもとに、曹魏都城の宮城制度にあらわれた改革と成熟化を検討する。

東漢の建安九年(204)に曹操は鄴城を占領し、その全面的な改造に着手した。曹操は建安十八年に魏公を称し、同二十一年に魏王となったから、曹魏鄴城は東漢末年に造営された王国都城に属すが、曹丕即位後の黄初二年(221)に鄴城は三国魏の“五都”のひとつになる。この曹魏鄴城遺址では、1983年以来の考古学的な調査と発掘によって全体のプランがある程度復原できるようになった。その北半部の中央には10基あまりの版築基壇が集中し、ここが単一の宮城区域であったと考えられる。その配置を復原すると、南城門の中陽門、宮城の正南門、宮城正殿の文昌殿が、鄴城全体の中軸線を形成している。そのプランは王国都城にはじまるとはいえ、宮城制度におけるその改革は、三国魏の洛陽城の宮城に直接影響することになる。

漢魏洛陽故城では、2000年以來、北魏宮城のやや西寄りの中心区において考古学的な調査を継続し、北魏宮城の一号・二号・三号・四号建築基址などを相前後して発掘した。この区域は東西330m、南北790mの規模があり、正門・太極殿・頤陽殿など主要建築が南北に配置された北魏の宮城中枢部であったと考えられる。これらの建築遺構にトレンチを掘って断面の層位を観察した結果、北魏の宮城建築基址はすべて三国魏の宮城建築基壇をそのまま利用していることが明らかになった。つまり、北魏宮城のやや西寄りに位置する中心区は、三国魏に基本プランがすでに確立していたのである。文献をみると、魏の明帝(226～239在位)は洛陽城の宮城において太極殿の造営をはじめとする大規模な造営事業をおこなっている。したがって、三国魏における洛陽城の宮城は、曹丕称帝後しばらくは東漢期の雒陽都城の南北二宮構造を基本的に踏襲したが、魏の明帝が宮城を改造するに当たり、曹操が鄴城に対して創案した単一の宮城制度を継承するとともに、宮城門や太極殿などに新しいプランを創造したと推測できる。以後の西晋洛陽城や北魏洛陽城は、いずれもそれを基礎としており、宮城制度には変化がなかったのである。